3
大書
小国 230

# 赤いポスト

重松鷹泰 監修

しょうがくこくご

二年 下

文部省検定済教科書

教育研究所
資料室
小KC
078
60351
教科書文庫
6
810
74-1950
01304
49884

昭和25年8月12日 文部省検定済　小学校国語科用

寄贈

# 赤いポスト

しょうがくこくご　二年下

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449884

広島大学図書
0130449884

廣島大學
教育學部圖書

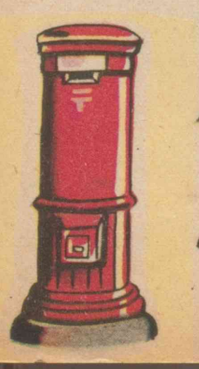
大阪書籍株式会社

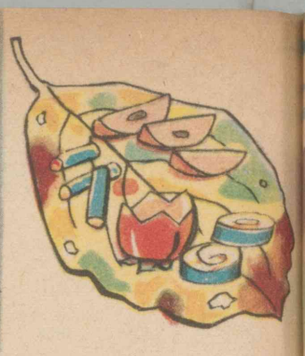
中央図書館

広島大学図書
0130449884

もくろく

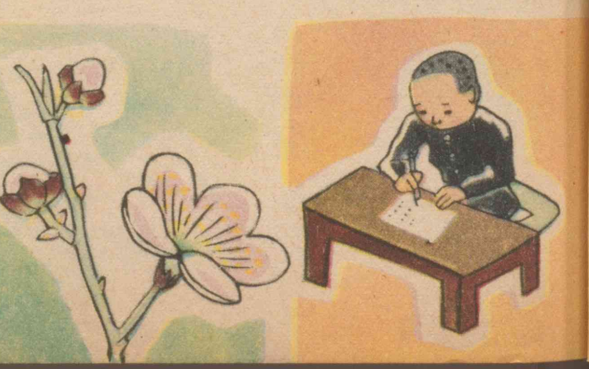

一　月夜の　おにわ
(一)　月夜の　おにわ……4
(二)　竹とり　ものがたり……6
二　山のぼり……28
三　にわとり
(一)　かきの木……44
(二)　ぽぷら……51
(三)　にわとり……53
四　さむい日
(一)　さむい日……57
(二)　しょうぼう犬……65





五　赤い　ポスト
(一)　山の　おばあさんへ……71
(二)　赤い　ポスト……78
(三)　山の　おばあさんから……80
(四)　いろいろな　手紙……88
六　たんじょうかい
(一)　うめの　花……92
(二)　たんじょうかい……94
七　わたくしの　けいこ……121


あたらしい　ことば
五十おん
かんじ



一　月夜の　おにわ

(一)　月夜の　おにわ
こんこん　ころころ
つゆの　玉、
木の　はを　すべって
こん　ころり。
ころころ　ころりと
こおろぎは、
つゆを　のみのみ
草の　かげ。

ちんちん　ちろりと
すずむしも、
声　はりあげて
かごの　中。
月が　出たのか
にわの　木の
上が、あかるく
なって　きた。

(二)　竹とり　ものがたり

1　竹とりの　おきな

野山かせぎの　おじいさま。

「竹とりの　おきなだ、

竹とりの　おきなだ。」

いつも　竹とり、ささ　かつぎ。

「いいおきなだ、

いいおきなだ。」

ある日　ありゃりゃと　おどろいた。

「ぴかりぴかり　光った、ぴかりぴかり　光った。」

竹の　ねかたに　まめの　人。

「ちっちゃい　ひめだ、ちっちゃい　ひめだ。」

その子　ひろうて、おじいさま、

「ほくほく　かえった、ほくほく　かえった。」

なくは　うぐいす、よい　ひより。

「ホウ　ホケキョよ、ホウ　ホケキョよ。」

これよ、ばあさま　まばゆかろ。

「うちまで　光るぞ、

うちまで　光るぞ。」

おお、おお、かわいい、おじいさま。

「かぐやひめだ、かぐやひめだ。」

それから　しぬの　やぶ。

「いつ　いってもだ。いつ　いってもだ。」

竹の　ふしぶし、金の　つぶ。

「ホウ　ホケキョよ、ホウ　ホケキョよ。」

むかし　むかしの　おじいさま。

「竹とりの　おきなだ、竹とりの　おきなだ。」

おとぎばなしの　かぐやひめ。

「それから　きかして、それから　きかして。」

## 2　かぐやひめ

かぐやひめは、ずんずん　大きくなって、三月ほど　たつと、もうりっぱな　むすめに　なりました。

お月さまのように　あかるい　かぐやひめの　かおを見て　いると、おじいさんは、もう　この　よの　中に、なに一つ　いやな　ことも、くるしい　ことも　なくなりました。

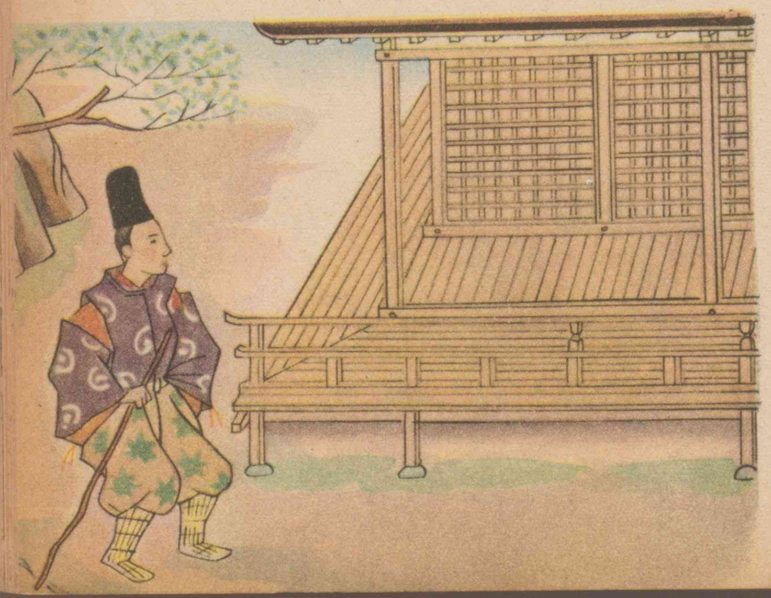
ところが、美しい　かぐやひめの　ことを　ききつけて、おおよめに　ほしいと　いう　人が、たくさん　出て

きました。けれども　かぐやひめは、どこへも　およめ
には　いかないと　いいました。
ところが、どうしても　かぐやひめを　およめに　く
ださいと　いって、ききいれない　人が、五人　いまし
た。五人とも　みぶんの　高い　人でした。
かぐやひめは、
「では、私の　ほしいと　思う　ものを、もって　きて
くださった　かたの　およめに　なりましょう」。
と　いいました。



## 3　石の　はち

五人の　うちで、石づくりと　いう　人は、かぐやひめから　こう　いわれました。
「天じくに　ある、おしゃかさまが　おつかいに　なった　石の　はち を、もって　きて　ください」。
石づくりは、天じくへ　いったように　見せかけて、こっそりと　いなかの　お寺を　あるきまわって　いました。すると、山の　中の　あ

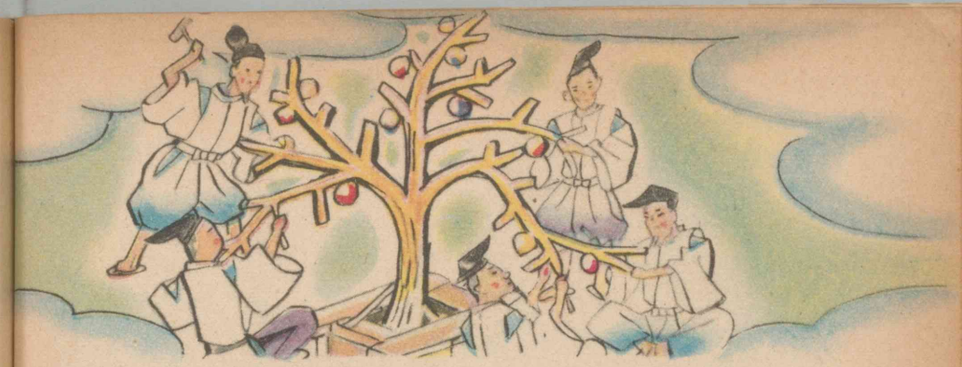


る お寺で、まっくろに なった、古い
石の はちを 見つけました。
石づくりは、それを もらって、かぐ"
やひめの ところへ もって いきました。
ひめは、だまって その はちを うけとり、よくよ"
く 見ましたが、すこしも 光りません。
「これは、ほんとうの ものでは ありません。」
と いって、はちを かえしました。
石づくりは、はちを かど口に すてて、にげかえっ"
て しまいました。



## 4 玉の えだ

くらもちと いう 人は、かぐやひめから こう い"
われました。
「東の 海の、ほうらいと いう 山へ いって、根が
銀で、みきが 金で、白い 玉の みが なって い"
る、木の えだを おって きて、ください。」
そこで くらもちは、東の 海に のりだしたと 見"
せかけて、日本で 一ばん じょうずな さいく人を、
こっそり よんで きて、玉の えだを 作らせました。
それを けらいたちに かつがせて、かぐやひめの



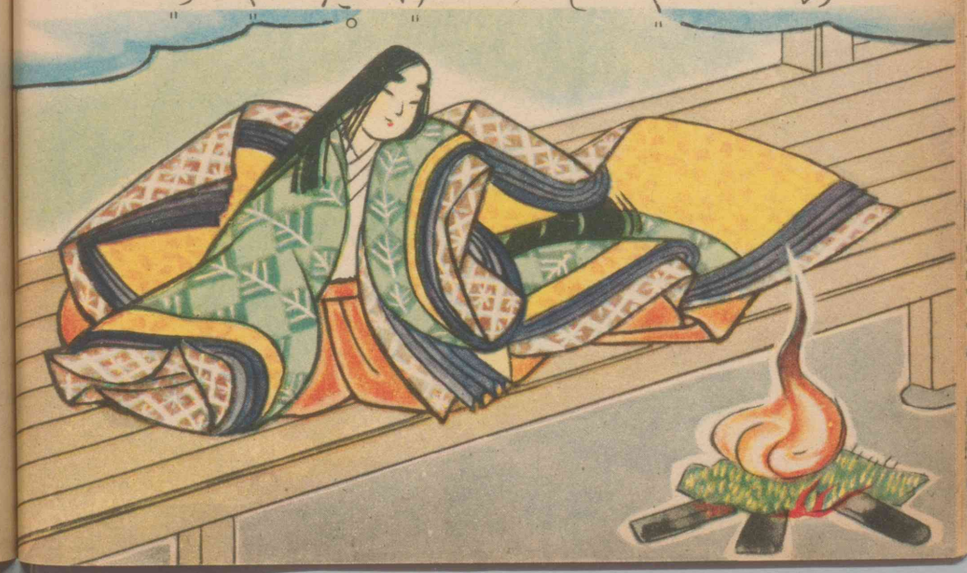
うちへ　やって　きました。
くらもちは、いかにも　ほんとうらしく、ほ"
うらい山の　話を　はじめました。すると　そ"
こへ、玉の　えだを　作った　人たちが、どや"
どやと　はいって　きて、
「くらもちさまは、玉の　えだを　こしらえた
おれいを、まだ　ください　ません。」
と　いいました。
くらもちは、きまり　わるく　なって、こそこ"
そと　にげて　いきました。



## 5　火ねずみの　かわの　きもの

みうしと　いう　人は、かぐやひめから　こう　いわ"
れました。
「もろこしに　いる、火ねずみの　かわで　おった　き"
ものを、さがして　きて　ください。」
みうしは、たくさんの　お金を　もろこしの　人に
わたして、火ねずみの　かわの　きものを、かって　き"
て　もらう　ことに　しました。
つぎの　年、もろこしの　人は、
「やっと　手に　いれました。」

と いって、金いろに 光った けの
きものを、みうしに とどけました。
みうしは、さっそく、それを かぐ
やひめの うちまで、はこびこみまし
た。
かぐやひめは、それが 火に やけ
ないか どうか ためして みました。
すると、すぐに 火が ついて、や
けて しまいました。みうしは がっ
かりして かえって いきました。



## 6 りゅうの 玉

みゆきと いう 人は、かぐやひめから こう いわ
れました。
「りゅうの くびに ある、五しきの 玉を 取って
きて ください。」
そこで、みゆきは けらいたちに いいつけて、りゅ
うの 玉を 取りに やりました。けらいたちは りゅ
うを こわがって、どこかへ かくれて しまいました。
いくら まっても、けらいたちが かえらないので、
みゆきは、じぶんで 玉を さがしに、海へ 出かけ

ました。
船に　のって　おきへ　出ると、ま
もなく　空が　まっくらに　なって、
おそろしい　かみなりと　いっしょに、
大あらしが　やって　きました。
船は、今にも　しずみそうに　なったので、
みゆきは　ふるえあがって　しまいました。
船は、やっと　はまべに　流れつきました。
みゆきは　すっかり　よわって、船から　たす
けだされました。

## 7　つばめの　こやす貝

まろと　いう　人は、かぐやひめか
ら　こう　いわれました。
「つばめの　うむ、こやす貝と　いう
貝を、見せて　もらいましょう。」
そこで　まろは、つばめの　すを　さがして
いると、ちょうど、大きな　家の　のきに、つば
めが　すを　作って　いました。
まろは、じぶんから　かごに　はいって、けらい
たちに　つなで　つりあげさせました。

かごが　つばめの　すに　とどくと、むちゅうで　す"の　中に　手を　さし入れて　みました。すると、なん"だか　かたい　ものが　手に　さわりました。

あわてて　それを　つかむと、

「あったぞ　あったぞ。早く　おろせ。」

と　さけびました。けらいたちが　あわてたので、つな"が　まん中で　きれて、まろは　どしんと　地めんに　おちました。それでも、手だけは　しっかり　にぎって　いました。にぎった　手を　ひらいて　みると、それは　つばめの　ふんでした。



8　みかどの　おつかい

みぶんの　高い　人たちが、こん"なに　大さわぎを　したので、かぐ"やひめの　うわさが、みかどの　お耳に　はいりました。

みかどは、おつかいを　やって、かぐやひめに　すぐ　ごしょへあがるようにと、つたえさせま"した。けれども、かぐやひめは、ききいれませんでした。

## 9　月を　見て　なく

ある　年の　春の　ころから、夜に　なると、かぐや"ひめは　じっと　かんがえこむように　なりました。

秋が　きて、月が　美しく　なると、かぐやひめは月を　見て、かなしそうな　かおを　して　いました。

十五夜が　近く　なると、かぐやひめは　とうとう声を　たてて　なきだしました。おじいさんと　おばあ"さんが、おどろいて　その　わけを　たずねますと、かぐやひめは、

「私は　月の　都の　ものでございます。いよいよ



この　十五夜には、月の　都から　むかえが　きて、どうしても　おわかれしなければ　なりません。それで　かなしんで　いるので　ございます。」と　こたえました。

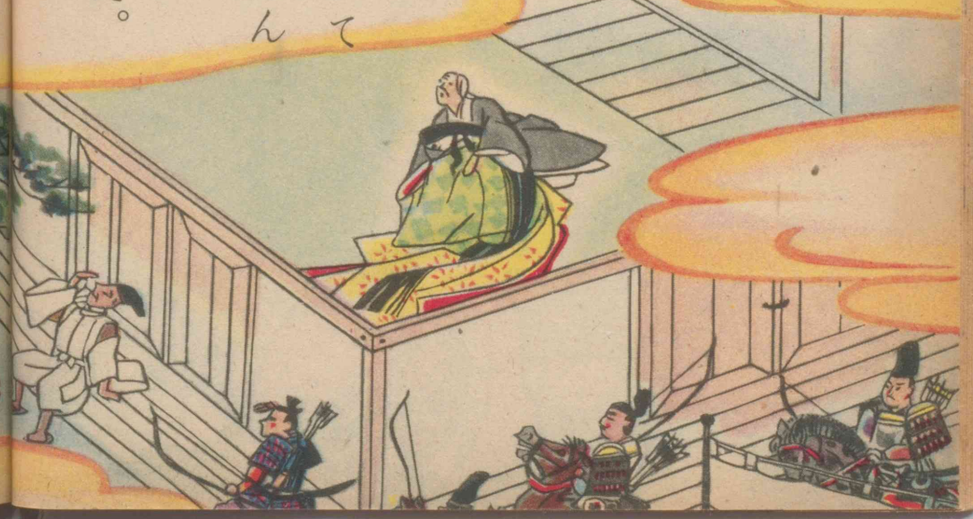
おじいさんと　おばあさんは　びっくりして、

「小さい　ときから　そだてた　おまえと　どうして　わかれる　ことが　できよう。」と　いって、いっしょに　なきました。おじいさんは、

「かぐやひめを、月の　都の　人に　わたさないように　まもって　ください。」と、みかどに　おねがいしました。

## 10　十五夜の　ばん

いよいよ　十五夜の　ばんに
なりました。おじいさんの　家の
まわりは、ゆみやを　もった　さむ"
らいで、いっぱいに　なりました。
おばあさんは、しめきった　くらの
中で、かぐやひめを　しっかり　だいて
いました。おじいさんは、入口で　ばん
を　して　いました。
やがて　十五夜の　月が　出ました。



夜中に　なると、きゅうに　そこらが
ひるまよりも　あかるく　なりました。すると
空の　上から　百人ばかりの　天人が、雲に　のり
しずかに　おりて　きました。ゆみやを　つがえ"
と　した、二千人の　さむらいは、からだが
ふるえて、どうする　こども　できません。
天人たちは、まぶしいほど　きらきら
光った　きものを　きて、空を　とぶ
車を　一だい　もって　きて　いました。
やがて、天人の　ひとりが、

「かぐやひめ、早く　おいで。」
と、声を　かけました。すると、くらの
戸が　するすると　あいて、ひめの　す
がたが　あらわれました。かぐやひめは
おじいさんに　むかって、
「それでは、もう　これで　おわかれ　いたします。」
と、きものを　ぬいで、
「これを　私と　思って　ください。月が　出た　ばん
には、どうか　大空を　見あげて　ください。」
と　いいました。おじいさんと　おばあさんは、もう

なにも　いえなくて、ないてばかり　いました。
天人は、月の　都から　もって　きた　はごろもを、
ひめに　わたしました。
ひめは、みかどに　おわかれの　手紙を　かき
ました。
天人が　いそいで　はごろもを　きせ
ると、かぐやひめは、空を　とぶ　車に
のりました。かぐやひめは、天人たちに
とりかこまれて、しずかに　天へ　のぼっ
て　いきました。

## 二　山のぼり

### 1

私たちは、きのう　まる山へ　のぼりました。

こうえんの　よこの　道から　はいって　いきますと、だんだん　山道になりました。

道の　そばを　川が　流れて　いて　ざあざあと　雨の　ふるような　音が

して　いました。みんなが　道から　のぞきこみました。

水は、みどりいろに　光って　流れて　いました。

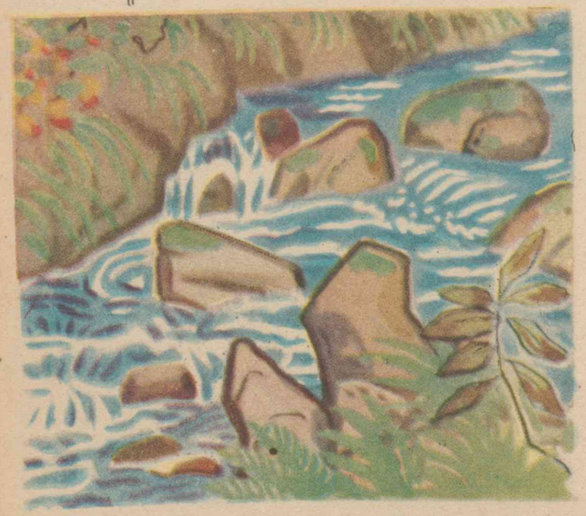
川ぞこの　石が　見えるほど、きれいな　水でした。

ところどころ　小さな　たきに　なって、白い　あわを　たてて　いました。

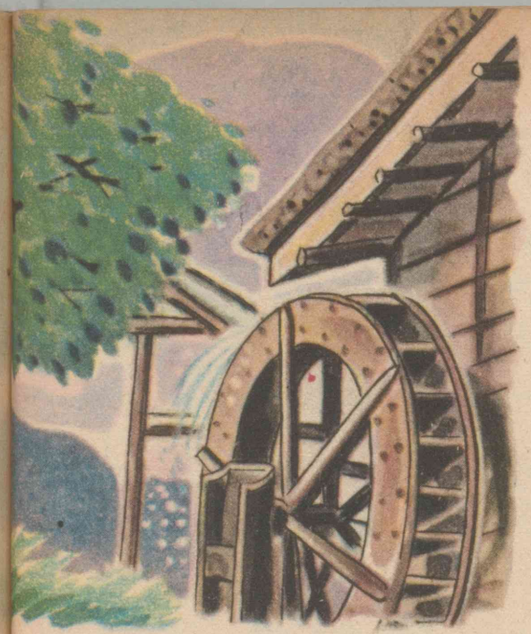
やすひこさんが、

「あれ、うおが　いる。」

と　いいましたが、見えません　でした。

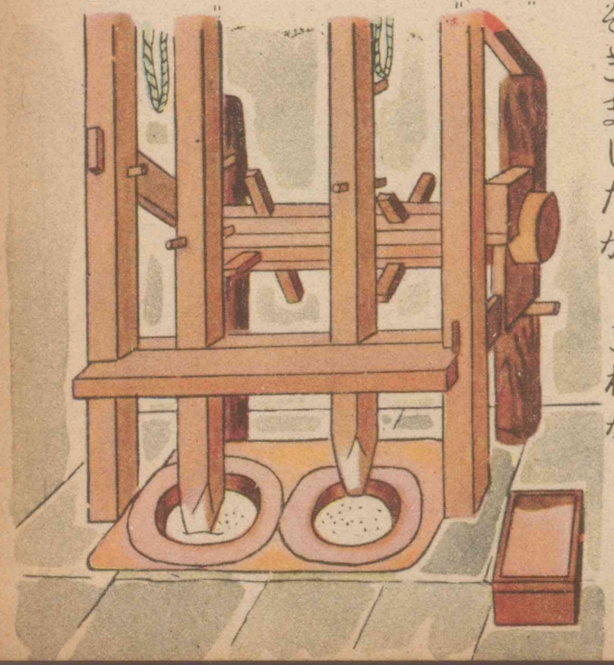


水が　ゆらゆら　して、なんだか　うおが　およいで
いるように　見えました。
だいぶん　いくと、水車が　ゴットン　ゴットンと
まわって　いました。みんなが、
「水車を　はじめて　見た。」
「ずいぶん　大きな　水車だ。」
などと　いいました。
水車は、水を　ざぶざぶ　うけて　まわって　いました。水車を
見て　いると、じぶんの　からだも　くるくる　まわるようでした。ときどき、ギイギイと　音が　しました。





みんなは、かわるがわる　水車ごやの　まどを　のぞきこんで　いきました。私も　のぞきましたが、きねが
ひとりで　米を　ついて　いるだけで、人は　だれも　いませんでした。こんな　山の　中で
水車が　ひとりで　うすを　ついて　いるのは、なんだか　ふしぎに　思われました。



道は　少し　さかに　なって、りょうがわに　大きな　木が　立って　いました。それで　うすぐらく　なって　いました。

だんだん　あかるく　なったと　思ったら、もみじの　木が　おおく　なって　きたのでした。

きいろい　もみじも　あれば、まっかな　もみじも　ありました。

道の　上まで　えだが　のびて　きて、私たちの　あたまの　上も、

もみじで　いっぱいに　なりました。だれかが、

「もみじの　トンネルだ。」

と　いいました。

2

「さあ、この　まるきばしを　わたるのですよ。」

と、先生が　おっしゃいました。

たに川に、まるい　木が　二本　わたして　ありました。水が　下を　走って　いるので、

ちょっと　こわいように　思われました。

みんなが、

「やあ。」

と　いって、たちどまりました。

「おまちなさい。先生が　先に　わたって　みます。」

先生は、一ぽ　一ぽ　ためす　ように、はしを　わたって　おいきに　なりました。

そうして　むこうぎしから、

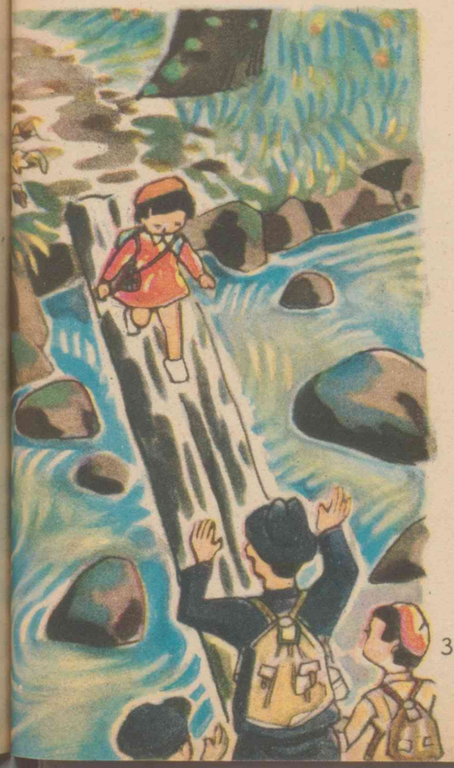
「だいじょうぶです。一列に　なって　五六人ずつ　わたって　おいでなさい。」

と　おっしゃいました。あきらさんを　せんとうに、わたりはじめました。走って　わたる　人も　ありました。

一ばん　おしまいに、さちこさん　ひとりが　のこりました。さちこさんは、かおは　にこにこ　わらっていましたが、少し　こわそうでした。

「こわくないわ、さちこさん。早く　いらっしゃい。」

と、みんなで　よんで　あげました。先生も、
「さあ、元気を　だして、ひとりで　わたって　おいで
なさい。」
と　おっしゃいました。さちこさんは、はしを　わたり
はじめました。こちらでは、先生が　わらいながら、
ボールを　うけ取るような
みぶりを　して、まって
いらっしゃいました。
さちこさんが、走りこむ
ように　して　わたりおわ





ると、先生は、
「よいしょ。」
と　いって、だきあげる　まねを　なさいました。
私たちも　手を　たたきました。

3

「ここから、きゅうな　のぼり
です。気を　つけて　いらっ
しゃい。」
と、先生が　おっしゃいました。

道は　ずいぶん　ほそくなって、りょうがわに　ささが　いっぱい　はえています。いつのまにか、木も　なくなって、空が　あかるく　なりました。

先生が、

「そら、あそこが　山の　ちょうじょうです。もう　どこから　のぼって　も　かまいません。みなさんの　すきな　ところから　のぼりなさい。」

と　おっしゃいました。



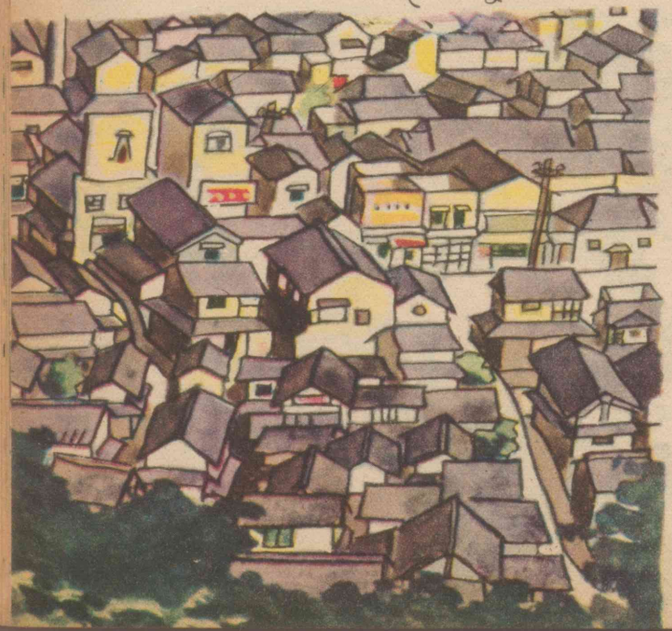
まるみがかった　ちょうじょうが、目の　前に　見えました。みんなが　ばらばら　かけだしました。私も　かけだしました。もう　先に　ついた　人たちが、

「早く　おいでよ。」

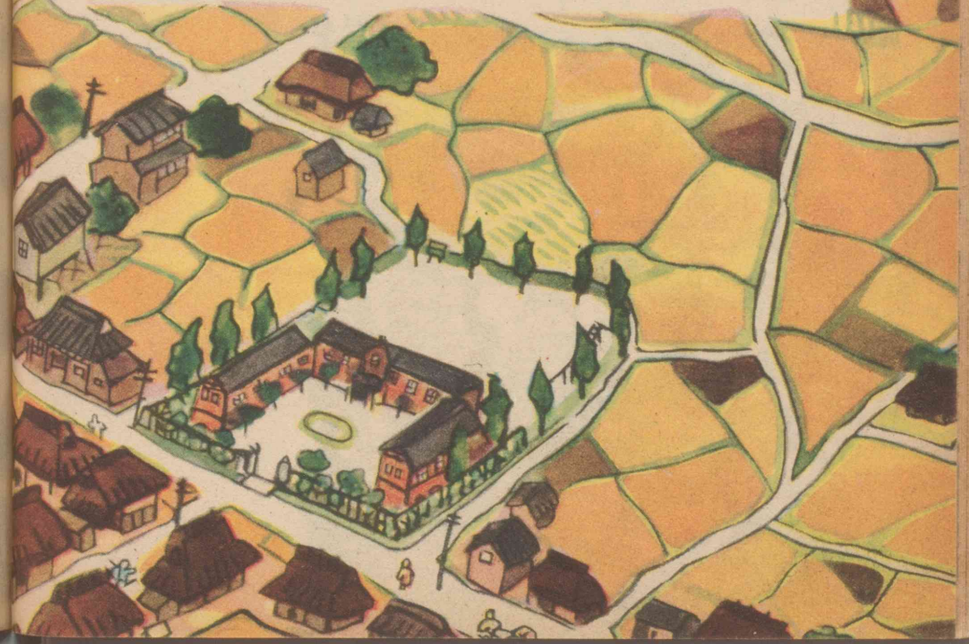
と　いって、よんで　います。

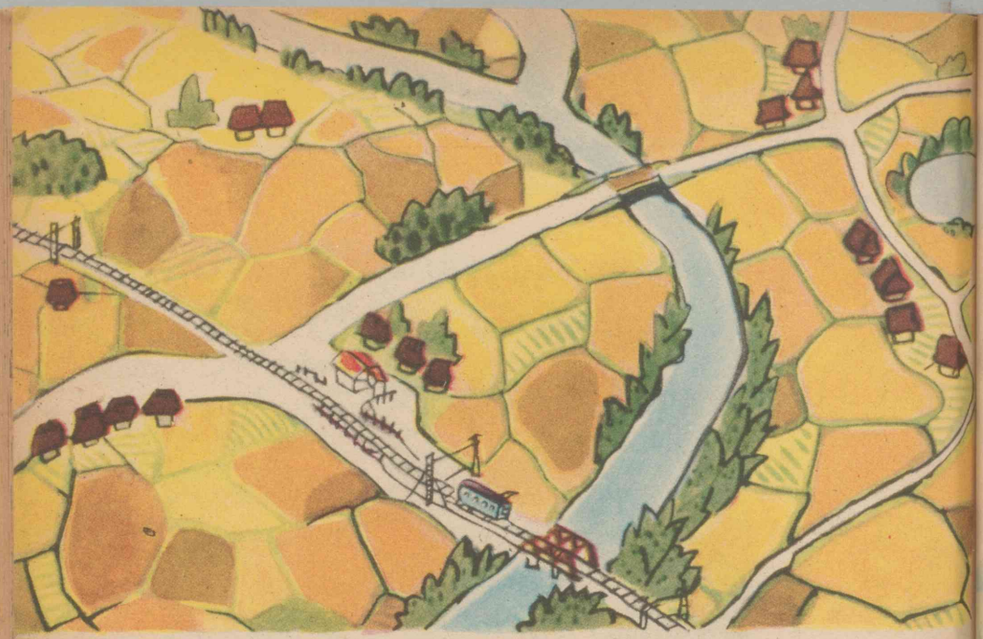
ちょうじょうは　おかのような　ところでした。あせが　出たので、ぼうしを　取って　ふきました。

目の　下に、私たちの　町が　はこにわのように　見えました。



みんなで、私たちの　学校を
さがしました。
「あれあれ、あそこだ。」
と、だれかが　いいました。見る
と、まるで　つみ木で　作ったよ
うに　見えました。
「あんなに　小さかったら、あし
た　いっても　はいれないぞ。」
と、しげおさんが　わらいながら
いいました。





「でんしゃだ、でんしゃだ。」
と、あきらさんが　いいました。
小さな　でんしゃが　のろのろ
走って　いました。
「あれ、おもちゃの　でんしゃみ
たいだ。」
と、きよしさんが　いいました。
町の　まわりに、ひろい　ひろ
い　たんぼが　見えました。いね
をかった　田と、まだ　からな

い　田とが、まじって　いて
きれいでした。
先生が、いつのまにか　う"
しろに　立って　いらっしゃ"
いました。そうして、
「ほら、たんぼの　ずっと
むこうに、かすんで　見え"
る　ところが　あるでしょ"
う。あそこが　海ですよ。」
と　おっしゃいました。そこは　うすく　光って　いま"



した。
「海が　はっきり　見えるといいなあ。」
と、みんなが　いいました。
「さあ、それでは　おひるごはんに
しましょう。下の　けしきを　見"
ながら　いただきましょう。」
と、先生が　おっしゃいました。
みんなは　大よろこびで、手を　た"
たきました。私たちは、まるい　大きな
わを　作って、おべんとうを　たべました。

## 三　にわとり

### (一)　かきの　木

ぼくの　うちの　いどばたに、大きな　かきの　木が一本　あります。ぼくは　毎朝　かおを　あらう　時に、いつも　この　かきの　木を　見あげます。

ことしは、えだも　おれそうに　たくさん　なって　います。まっかで　おいしそうですが、しぶがきですから、すぐには　たべられません。

この　かきの　木は、おとうさんの　たんじょういわいに、おじいさんが　おうえに　なったのだそうです。おとうさんが、小学校へ　あがった　ころは、やねのひさしぐらいだったそうですが、今では、やねよりも、ずっと　高く　なって　います。

きょう　学校から　かえって、いもうとたちと、かきの木の　下で　ままごとあそびを　しました。むしろを　しいて、おもちゃの　おかって　てどうぐを　もって　きました。かきの　はを　まないたの

上で、ちょんちょん きざんだり、まるめて おかしを
作ったり しました。
かきの はは、もう だいぶん ちって しまって、
根もとの くぼんだ ところに、赤い はや きいろい
はが、つもって いました。
しばらく あそんで いると、おとうさんが、
「ひろし、もう じき おまつりだから、かきを もい
で あげよう」。
と おっしゃって、なやから はしごを もって おい
でに なりました。ぼくたちは、ままごとを やめて

見て いました。
おとうさんは、はしごを 木に おかけに なると、
かごを こしに さげて、木に のぼって いかれました。
おとうさんは、上の 方から じゅんじゅんに、
もいで いかれます。かごが
いっぱいに なると、おりて
こられます。はしごの 下で
ねえさんが

かごを　うけ取ります。うけ取った　かごを、えんがわに　もって　いって　あけると、おとうさんは、からになった　かごを　さげて、また　のぼって　いかれます。

こんどは、長い　竹の　ぼうを　つかって　とるのです。ぼうの　先には、はりがねが　ついて　います。

ぼうを　ぐうっと　のばして、とおくの　えだに　ひっかけます。手の　とどく　ところまで、えだを　ひきよせて、かきを　もぎます。もぎおわった　えだを　はなすと、えだが　ぴーんと　はねかえります。

手の　とどかない、ずっと　先の　かきは、ぼうで



小えだを　おって　おとします。

おとうさんが　木の　上で、

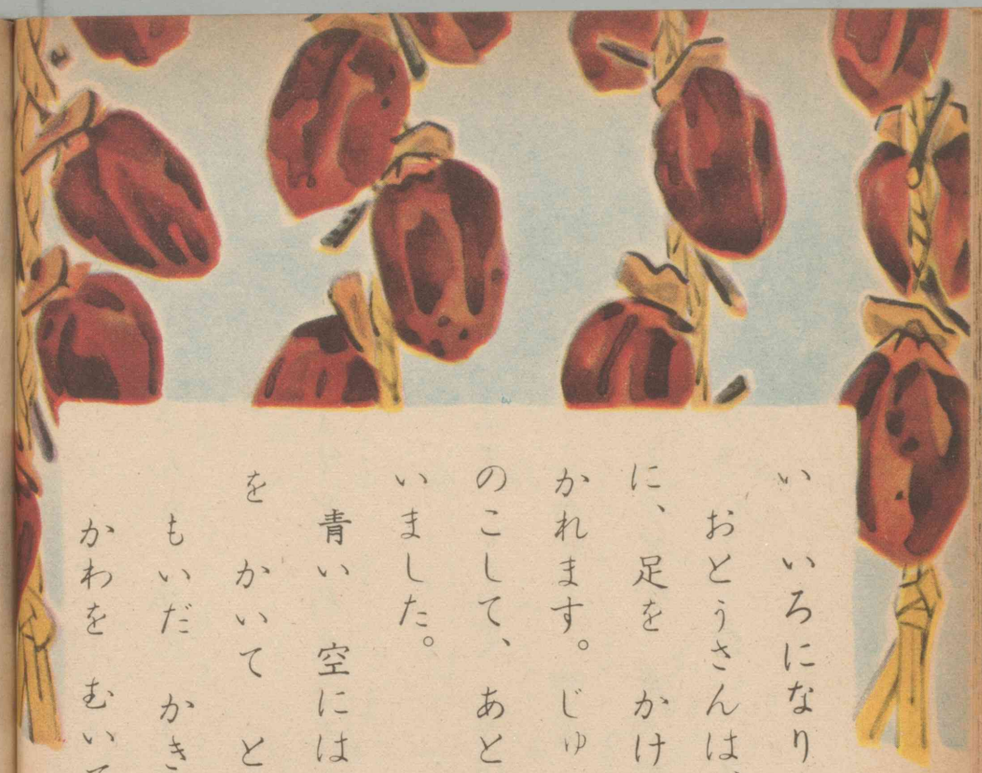
「いいか。」

と　いいますと、ねえさんが　下で、

「はい。」

と　こたえて、ざるで　うけとめます。うけそこなって、地めんに　ころがる　時も　あります。そんな　時は、ぼくと　いもうとが　走って　いって　ひろいます。

どの　かきにも、白い　まくが、うすく　ついて　います。手で　ふくと、すぐ　取れて　つやつやと　美し



いいろになります。

おとうさんは、えだの　またの　ところに、足を　かけて、どんどん　もいで　いかれます。じゅくしに　するのを　少しのこして、あとは　みんな　もいで　しまいました。

青い　空には、とんびが　ゆっくり　わを　かいて　とんで　いました。

もいだ　かきは、たるがきに　します。かわを　むいて　つるしがきにも　します。



## (二)　ぽぷら

### 1　ぽぷら

ぽぷらの　えだが、
竹ぼうきのように
のびて　いる。
きいろい　はが、
十まいほど　のこって、
えだで　ふるえて　いる。

## 2　しも

うまが
まっ白な　いきを　はいて、
ふう　ふう　いいながら、
たわらを　はこんで　くる。
よこの　草はらに、
まっ白な　しもが
おりて　いる。

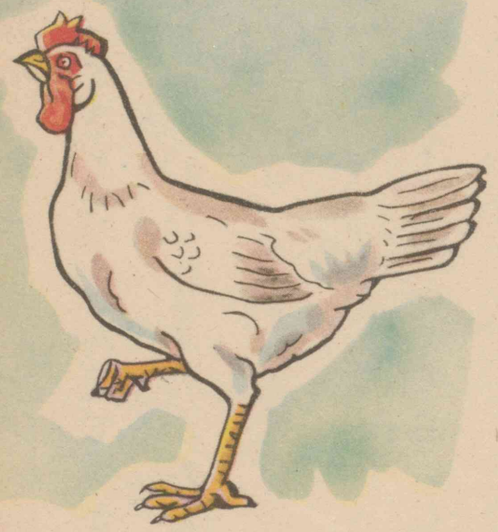
## (三)　にわとり

にわとりを　見て　いると　おもしろい。

○

右や　左を　見まわしながら、ゆっくり　歩いて　います。

ジャン　ケン　ポンを　して　いるようです。足を　上へ　あげる　時は、つぼめるから　石です。下へ　おろす　時は、すっかり



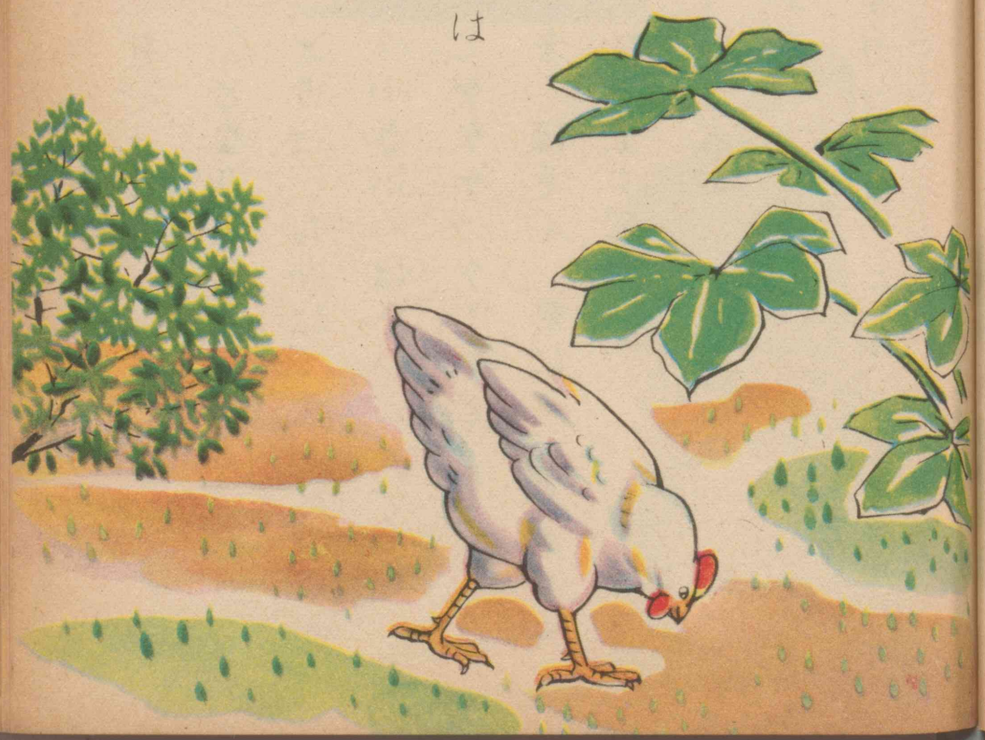
足の　指を　ひろげるから　紙です。
ときどき　かた足で　立って　います。あんなに　長い　あいだ、よく　かた足で　立って　いられると　思います。

○

けさも、にわの　あちらこちらを、「コッ、コッ、コッ。」と　いいながら、えさを　さがして　いました。
やつでの　はから、ぱたりと　しずくが　おちると、にわとりは、えさが　おちて　きたのかと　思って、あわてて、かけて　いきました。



なっぱを　こまかく　きざんで、ふすまを　まぜて　入れて　やると、こつこつ　えさを　つつきます。
水を　入れて　やると、ちょび　ちょびと　のんでは　上を　むいて、いそいで　口ばしを　うごかします。



○

となりの　うちの　にわ"
とりは、ちゃぼです。
小さい　ほそい　声で、
「ケケケッケー」と、くび"
を　ほそく　前に　だして
なきます。

うらの　うちの　にわとりは、大きな　太い　声で
「ゴゲゴッゴー」と　なきます。
うちの　にわとりは、「コケコココココ」と　なきます。



四　さむい　日

(一)　さむい　日

一月十日　はれ

北風が　びゅう　びゅう
ふいて、さむい　朝です。北を　むいて　歩いて　いく"
と、はなや　耳が　ちぎれそうです。
道の　水たまりには、うすい　ガラスのような　こお"
りが、はって　います。ふむと、パリパリと　われます。
ぼくは、おもしろく　なって、あちらこちらの　こお"
りを、パリパリと　わって　歩きました。

一月十二日　　くもり

きょうも　どんより　くもって　いて、つめたい　風が　ふいて　います。

家へ　かえると、もう　四じを　すぎて　いました。

「ただいま。」

と　いうと、おかあさんが　おかってから、おかえり。さむかったでしょう。」

と　おっしゃいました。へやに　はいって、外を　見ると、赤い　なんてんの　下に、すずめが

二わ　きて　いました。今　おかあさんが、おすてに　なった　白い　水の　中に、米つぶでも　あったのか、ぴょん　ぴょんと　なわとびを　するように、みがるに　とびまわって　ひろって　います。

ひろって　しまうと、おやすずめは、こごえた　足を　一本　おなかに　つっこんで　一本足で　立って　います。さむい　風が　びゅうっと　ふくと、からだじゅうの　はねが　ゆれます。

子すずめが、ぴょん　ぴょんと　おやすずめの、そばに　いって、なにか　そうだんしたのか、

「ち、ち、ち、ち。」
と、二わが　そろって、くもった　空へ　とんで　いって　しまいました。

一月十三日　　雪

『こくご』の　本を　よんで　いると、おかあさんが
「大きな　ぼたん雪よ。」
と　おっしゃつたので、外へ　出て　見ました。
わたか　紙を　ちぎったような、いろいろの　かたちを　した　大きな　ぼたん雪が　ふって　います。

空を　見て　いると、高い　ところを　くろい　小さな　虫が　とんで　いるようです。
ぼくは　おもしろくて　たまらないので、じっと　見て　いると、ぼくの　からだが　ういて　いくような　気が　しました。

一月十四日　　くもり　のち　はれ

「雪だるま　こしらえて。」
と、いもうとが　いうので、ぼくは　手ぶくろを　はめて　外へ　出ました。小さな　雪の　玉を　こしらえて、雪が　つもって　いる　上を　ころがしました。大きな

雪だるまが　できました。
すみで　口や　目を　こしらえ、木で　はなを　つけました。
松の　はで　ひげを　つけました。おもしろい　かおに　なった。
たので、ふたりで　ふきだしました。

一月十五日　くもり

としおくんの　うちへ　あそびに　いきました。
おやつの　みかんを、ふたりで　たべて　いる　時に、
「みかんの　しるで　あぶりだしを　しよう」。



と、としおくんが　いいました。
ぼくは、どんな　ことを　するのかと　思って　見ていると、としおくんは、ちゃわんに　みかんの　しるを　しぼって　入れました。それから　マッチの　じくの　先に　しるを　つけて、はんしに　えを　かきました。
としおくんは　たこ、ぼくは　雪だるまを　かきました。それを　火に　あぶると、雪だるまも、たこも、だん

だん　きえて　いきます。ぼくが、
「おや、きえて　しまった。」
と　いうと、としおくんは、
「もう　少し　つよく　あぶって　いると　出て　くるよ。」
と、おしえて　くれました。火の　近くへ　紙を　やると、
雪だるまが　きいろく　はっきりと　出て　きました。
としおくんの　たこは、もっと　はっきり　出ました。
おもしろく　なって、えや　字を　なんまいも　なん
まいも　かいて　あぶりました。



かじが　あった　時、小さい　子どもが　にげだせな
いで、もえて　いる　家の　中に、とりのこされる　い
とが　あったら　どうでしょう。
かじの　ために、すっかり　こわがって、声を　たて
る　ことも　わすれ、ただ　うろうろするばかりです。
その　うちに　けむりに　とりまかれ、どちらへ　にげ
て　いいやら、わからなく　なって　しまいます。
こんな　時に、すばやく　とびこんで、子どもを　た
すけだして　くれる　犬が　いたら　いいですね。

イギリスの　ロンドンには、そういう　犬が　いるのです。いつも　しょうぼうたいの　人たちと　いっしょに　すんで　いて、　かじが　あると、すぐに　とんで　いって、にげられないで　こまって　いる　子どもを　たすけだすのです。

この犬を、しょうぼう犬と　よんで　います。ロンドンの、ある　しょうぼうたいに、ボブと　いう　名前の　しょうぼう犬が　いました。とても　りこうな　犬で、今までに　もう　十二人も　子どもを　たすけだした　ことが　あるのです。

ある時、かじが　ありました。しょうぼうたいは　すぐに　かけつけました。ボブも　いっしょに　いきました。かじばに　かけつけると、ひとりの　女の　人が、とんで　きて　さけびました。

「早く　たすけて　ください。子どもが　いるのです。二つに　なる　女の子です」。女の　人は、声を　ふるわせながら、もえる　じぶんの　家を　指さして　いいました。

「それっ。」

と、しょうぼうたいの人は、すぐにボブをやりました。ボブは、もうもうと立ちこめるけむりをこわがらないでいちもくさんにかいだんをかけのぼりました。

五分ばかりたちました。

ボブがかえってきたのです。赤いふくのはしを口にくわえて、女の子をつれてかえってきたのです。それを見ると、女の人はすぐにかけよって、子どもをだきあげました。

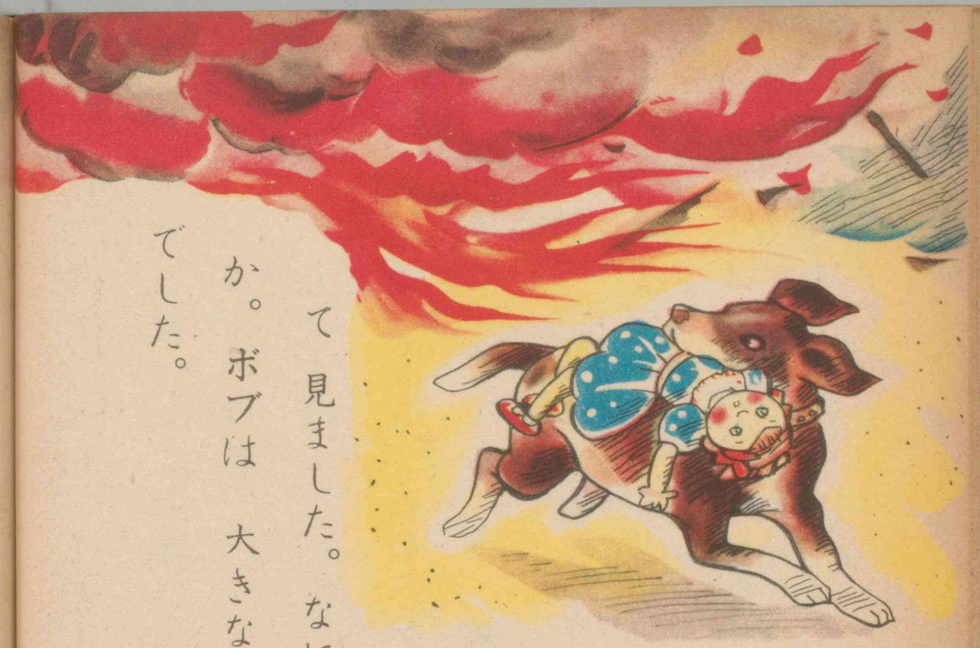


女の人は、ものもいわずに子どもをだきしめて、わっとうれしなきになきました。ボブのおかげで、やけど一つしないでたすかったのです。

しょうぼうたいの人たちは、ボブのせをなでてやりました。ところが、どうしたことか、ボブはまた、もえているいる家の中へとびこもうとして、からだをもがくのです。

「まだ家の中に、人がいるのかもしれない。」

しょうぼうたいの人は、こう思いました。そこでまたボブをはなしてやりました。



ボブは　家の　中に　かけこみましたが、まもなく　口に　なにかくわえて　かえって　きました。

「なんだろう。」

しょうぼうたいの　人は、ボブの　くわえて　きた　ものを、とって　見ました。なにを　くわえて　きたと　思いますか。ボブは　大きな　人ぎょうを　くわえて　きたのでした。



## 五　赤い　ポスト

### (一)　山の　おばあさんへ

きよしさんは、山の　おばあさんに　手紙をかきました。おばあさんを、たんじょう日におまねきする　手紙でした。

山の　おばあさんと　いうのは、おかあさんの　おかあさんで、山の　村に　すんで　いらっしゃ

るので、きよしさんの　うちでは、みんなが　そう　よ"
んで　いました。
おかあさんは、
「おばあさんに、お話するように　かけば　いいのです。」
と　おっしゃいました。そうして　そばで　あみものを
しながら、ときどき　きよしさんの　方を　見て　いらっ"
しゃいました。
かいて　いる　うちに、きよしさんの　目の　中には、
山の　おばあさんの　かおが　ちらちら　うつりました。



おばあさん
ことしは　いつもより　さむいので、おかあさん"
は、おばあさんが　かぜを　ひきはしないかしらと、
しんぱいして　いらっしゃいます。
二月十二日は、ぼくの　たんじょう日です。おば"
あさん、おぼえて　いらっしゃいますか。
きょねんは　きて　くださいましたね。そうして
はなさかじいさんの　お話を　して　くださいまし"
たね。ことしも　ぜひ　おいでください。ひろしく"
んの　ところの　おばさんも、きっと　いらっしゃ"

るでしょう。ことしは　おじいさんにも　ぜひ　きて　いただきなさいと、おとうさんが　おっしゃって　います。

みんなで　きょねんのように　たのしく　やりたいと　思います。

ぼくは　手紙を　はじめて　かきました。うまくとどけば　いいと　思います。

おばあさん、とどいたら　へんじを　ください。

さようなら



かきおわって、きよしさんは、

「これで　わかるかしら。」

と　いいながら、おかあさんに　わたしました。おかあさんは　小さい　声で　よんで　いらっしゃいました。

「これで　よく　わかります。」

と　おっしゃって、おわりの　ところに、

二月五日

きよし

おばあさん

と、かくように　おしえて　くださいました。
それから　ふうとうに　入れました。あて名も　おしえて　もらって　かきました。きっても　はりました。
「これで　ほんとうに
とどくかしら」。
と、きよしさんは　なんだか　しんぱいです。おかあさんの　かおを　見ますと、おかあさんは
「それは　まちがい。あ
りませんよ。おばあさんは　きっと　へんじを　くださるでしょう」。
と　おっしゃいました。
きよしさんは　うれしく　なって、
「では、ポストに　入れて　きますよ」。
と　いいながら、手紙を　もって　立ちあがりました。

## (二) 赤い ポスト

はじめて かいた 手紙を もって、
ぼくは 走って いった
赤い ポストは、
いつもの とおり
だまって 立って いた。
せいのびして
手紙を 入れると、

そこの 方で、
ぱとんと 小さい 音が した。
ふと、おばあさんが
めがねを かけて、
ぼくの 手紙を よむ ところが、
目に うかんだ。
ぼくは「おねがいします。」と いって、
赤い ポストを そっと なでた。

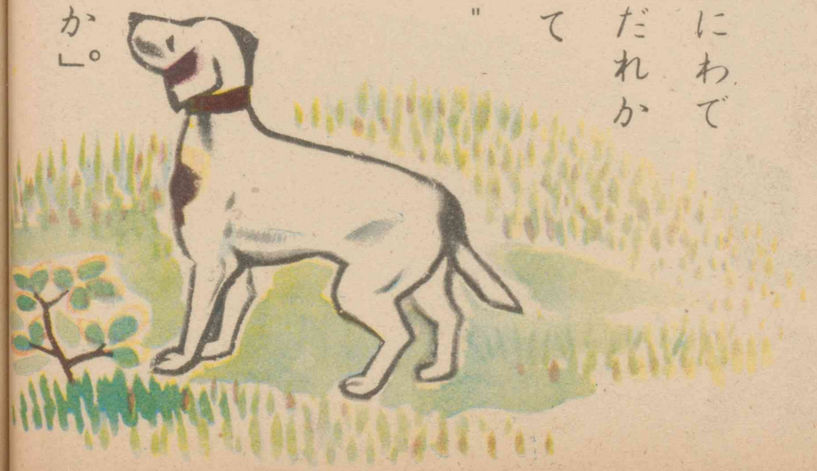
(三)　山の　おばあさんから

きよしさんが　学校から　かえって、にわで
しろと　あそんで　いますと、門から　だれか
はいって　くる　足音が　しました。出て
見ると、ゆうびんはいたつの　おじさん
でした。

「やまださん　お手紙ですよ。」

おじさんは、そう　いって　きよし
さんに　手紙を　さしだしながら、

「やまだきよしさんは、ぼっちゃんですか。」



と　ききました。

「はい　そうです。」

と　答えると、おじさんは　にこにこ　わらって、

「ほら、ぼっちゃんに　お手紙ですよ。」

と　いいました。

きよしさんは　むねが　どきどきして、かおが　あつ
く　なりました。

おじさんは、すた
すたと、門の　外へ
出て、おいて　あっ

た　赤い　じてんしゃに、すばやく　のりました。
「チリリン。」と　ベルの　音が　しました。
もう　おじさんは、木村さんの　門の　中へ　はいって　いったようでした。
「木村さん、ゆうびん。」
と、いう　声が　して　いました。
きよしさんは、いそいで　げんかんに　かけこみながら、

「おかあさん、おばあさんから　へんじが　きましたよ。」
と、大きな　声で　いいました。
おかあさんは、ミシンを　ふむのを　やめて、
「ふうを　きって、　よんで　ごらん。」
と　おっしゃいました。
ふうとうには、すみで、
「山田　清さま。」
と　かいて　ありました。

きよしさんは、ミシンの　上に　あった　はさみを
取って、ていねいに　ふうを　きりました。四つに　おって
た　手紙を　ひらくと、中は　えんぴつで、かいて　あ
りました。
よんで　いますと、おかあ
あさんが、
「おかあさんにも　きこえ
るように、よんで　ください。」
と　おっしゃいました。それで　きよしさんは、はじめ
から　声を　だして　よみました。

きよしさん
あなたの　お手紙は、きょう　とどきましたよ。
字が　きれいで、よく　わかるのに、かんしんしま
した。
おばあさんは、この　あいだ、かぜを　ひいて、二
三日　ねましたけれど、もう　すっかり　元気に　な
りました。
あなたの　たんじょう日には、きっと　いきますよ。
おじいさんも、ことしは　いっしょに　いくと　いっ

つきます。

ことしは　なんの　お話を　しましょうかね。よく
かんがえて　おきましょう。あなたがたは、なにを
やって　くれますか。おばあさんは、あなたがたの
元気な　かおを　見て、お話するのが　なによりの
たのしみです。十二日が　まちどおしくて　なりませ
ん。

おとうさん、おかあさん、ようこさんに、よろしく。

二月七日

ちよ

きよしさん



「まあ、よかったね。どれ、
おかあさんにも　見せて。」
と、おかあさんは　おっしゃっ
て、手紙を　じっと　ごらん
に　なって　いらっしゃいま
した。きよしさんは、ふと、さっきの　おじさんにも、
「ありがとう。」
と、いいたいような　気が　しました。

## (四) いろいろな 手紙

この あいだ、みんなで ゆうびんごっこを しました。ゆうびんごっこの あとで、みんなが、

「ほんとうの 手紙を かいて だしたい。」

と いいました。それで きょうは、ほんとうに 手紙を かいて だす ことに なりました。

めいめい だす あいての 人を きめて、かきはじめました。だす あいてが ない 人は、おかあさんに、かく ことに しました。

あきおさんは、かわって いった ともだちに あて て かきました。

とみだくん

元気ですか。ぼくは 元気で います。

そちらは 雪が ふりましたか。ぼくの 方は、もう なんかいも ふりました。雪だるまを 作っ

べりを　したりしました。

きみが　いって　しまってから、ぼくは　きんじょに　ともだちが　なくなって、さびしくて　たまりません。また　あそびに　きて　ください。

よしこさんは、とうきょうの　おじさんに　あてて　かきました。

おじさん。この　あいだは、どうわの　本を　送って　くださって、ありがとう　ございました。あの　どうわの　本は、おもしろくて　なんども　くりかえして　よみました。

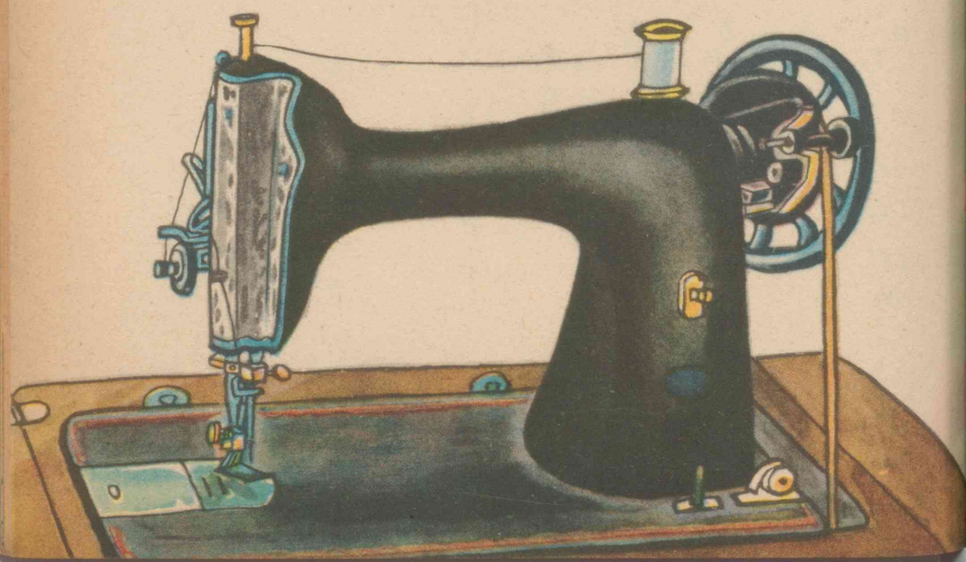
とうきょうは　にぎやかですか。おとうさんは、よしこが　三年生に　なったら、とうきょうへ　つれて　いって　あげると　おっしゃいました。私は、早く　三年生に　なりたいと　思います。

六　たんじょうかい

(一)　うめの　花

ちらほら　さきかけた
うめの　花。
白い　きれいな　花。
みどりの　竹やぶの　前に
ぽっかりと　さいて　いる。
おほしさまが、
空に　いっぱい
かがやいたようだ。

ミシンの　あたまが、
でんとうの　光で、くろ光りに
ぴかり　ぴかり　光って　いる。
白い　糸が　くるくる　まわって、
ミシンは　がた　がた　がたと
うごいて　いる。
あかるい　でんとうの　下で、
おかあさんは、
目を　ぱっちり　あけて、



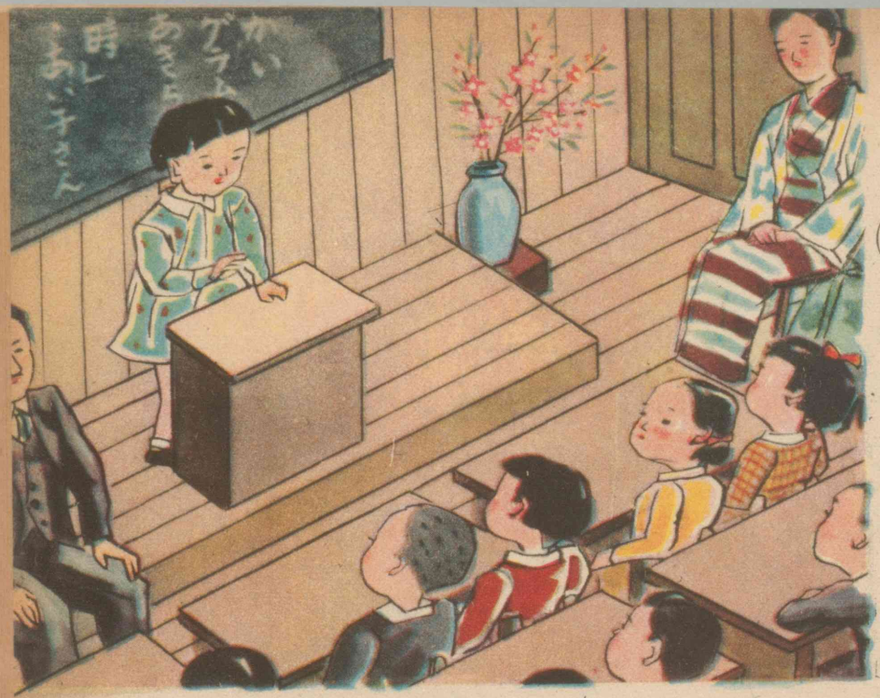
わたしの　ふくを　ぬっている。
口を　一の　じのように　して
いっしんに　ぬって　いる。

(二)　たんじょうかい

きょうは、これから　三月の　たんじょうかいです。
こくばんには、プログラムが　かいて　あります。

(1)　おいわいの　ことば　　あきらさん
(2)　お話「私の　小さい時」　　かずおさんと　あいこさん
(3)　うた「おかあさん」　　みちこさん
(4)　おどり「うさぎの　ダンス」　　さちこさんと　たかこさん





(5)　げき「ねすみの　かくれんぼ」　きよしさん　ほか八人

1　おいわいの　ことば

私たちが　お手紙で　おまねきした　おかあさんたちも、たくさん　おいでに　なって　います。

はじめに　あきらさんが　前に　出て、

「かずおさん、としおさん、

それから　あいこさん、さちこさん　おめでとう。
これから　たのしい　三月の　たんじょうかいを　い"
たします。どうぞ　おかあさんたちも　ごゆっくり
ごらん　ください。」
と　いいました。みんなは　にこにこして　手を　たた"
きました

## 2　お話「私の　小さい　時」

かずおさんの　お話

ぼくは　生まれた　時、ふつうより　小さい　赤ちゃ"
んだったそうです。おかあさんの　おちちが　たりない"



ので、ミルクで　そだちました。いつまでも　ちくびを
口から　はなさなくて、あそぶ　時でも、口に　くわえ"
て　いたそうです。
よく　おなかを　こわして、おいしゃさんに
かかりました。けれども　おとうさん
おかあさんが、だいじに　そだてて
くださったので、学校へ　あがって
から、まだ　一日も　やすんだ
ことは　ありません。
それから、のりものが　すきで、

おかあさんに　つれられて、よく　汽車を　見に　いきました。ふみきりばんの　おじいさんと、すっかり　なかよしに　なりました。

おじいさんは　ぼくに、

「ぼっちゃんは　きしゃが　すきだから、大きく　なったら、車しょうさんに　なるかな。汽車を　作る　人に　なるかな。」

と　おっしゃいました。

汽車の　おもちゃで　あそんだり、おかあさんに　汽車の　うたを　うたって　いただいたり　しました。



## 2　あいこさんの　お話

私は　きょうだいじゅうで、一ばん　じょうぶです。赤ちゃんの　時は、よく　ねんねして、

「おとなしい　らくな　子だ。」

と、よろこばれたそうです。

よちよち　歩きかけの　ころの　しゃしんを　見ると、まるで　だるまさんのように　太って　います。

四つぐらいの　時の　ことでした。ある日　おかあさんが、ごようで　ちょっと　おでかけに　なりました。

私は　ひとりで　さびしく　なって、おかあさんを

むかえに、かどの　たばこやさんの　方へ、歩いて　い"きました。いくら　まっても、おかあさんは　おかえり"に　なりません。おかあさんは、べつの　道を　と"おって　おかえりに　なったのです。

うちでは、私が　いないと　いって、大さ"わぎを　したのだそうです。

おむかえの　人に　つれられて、私は　うちへ　かえると、おかあ"さんの　かおを　見るなり、わっ"と　なきだしました。



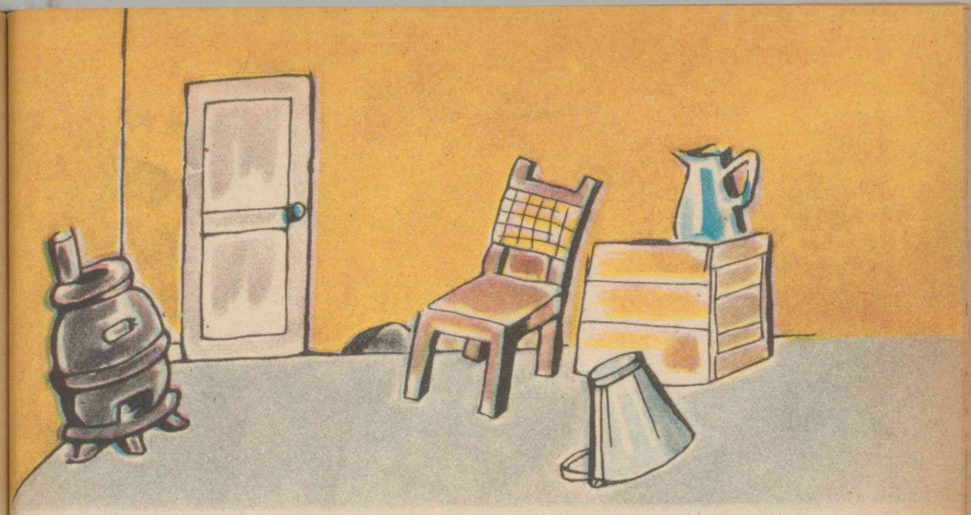
おかあさんの　お話では、私は本が　一ばん　すきで、ゆうがたおとうさんが　おかえりに　なる"と、すぐ　げんかんに　走って　いって

「おかえりなさい。」

と　いうより、

「ご本を　よんで　ちょうだい。」

と　いって、おとうさんの　ひざの上に　のって、本を　よませたそうです。



3

ねずみの　かくれんぼ

出て　くる　もの

母ねずみ　　子ねずみ　四　　ねこ
子ねずみ　一　子ねずみ　五
子ねずみ　二　子ねずみ　六
子ねずみ　三　子ねずみ　七

母　……それですからね。きょう
は　ねずみに　とって、一ばん
だいじな　ことを　おしえます。



子一　一ばん　だいじな　ことって　なんだろう。
子二　なんでしょうね。
母　なんでしょうね。よく　かんがえて　ごらん。
子三　あ、わかった。
子四　なあに、おしえてよ。
みんな　（くちぐちに）　おしえてよ　おしえてよ。
子三　ねこの　ことですね。おかあさん。
母　そうです。よく　わかりましたね。
みんな　（くちぐちに）　ああ、そうか。ねこの
ことか、こわいなあ。

母　ねこは　そっと　足音を　させないで、近づいて　きます。そうして、気の　ついた　時には、もう　にげられないのです。ぎゅうと、するどい　つめで　つかまえられて　しまいます。

みんな　（くちぐちに）　こわいねえ。こわいねえ。

母　だから、きょうは、ねこが　きても　すぐ　気が　ついて　にげられるように、おけいこ　しましょう。

みんな　（くちぐちに）　どんな　ことを　するのかなあ。

母　おかあさんが、かたっと　小さい　音を　たてるから、すぐ　どこかへ　かくれるんですよ。じょうずに　かくれた　子には、ごちそうを　あげます。

子五　ごちそうか。いいなあ。

母　では　はじめますよ。ようい。

子一　音なんか　しないね。

子二　おかあさん、わすれたのかしら。

子ねずみ三が、子ねずみ五の　あたまを　つつく。

子五　だれだい。ぼくの　あたまを　つつくのは。
四ちゃんだろう。
子四　あたし、しらないわ。
子五　そんなら　一ちゃんかい。
子一　ぼくだって　しらないよ。あれっ、ぼくの　あ"
たまを　つついたのは　だれだい。七ちゃんか"
い。
子七　ぼく　しらない。おや、なに　するんだい。



だんだん　にぎやかに　なって、みんな、むちゅうで
さわぐ。
母ねずみが　出て　きて、音を　たてる。
母ねずみ　じれったく　なって　くる。
母　にゃおん。
子ねずみ、あわてて　にげまわる。
母　これは　どうしたって　いうんです。
子ねずみたち　しずまる。
子四　なあんだ、おかあさんか。
子五　ぼく、ほんとうの　ねこかと　思って

びっくりした。

母　いけませんね。今のは　らくだいです。
みんな　ねこに　つかまって　しまいますよ。
そんな　ことでは、とても　りっぱな　ねずみ"
には　なれません。

子五　三ちゃんが　いけなかったんだよ。はじめに
ぼくの　あたまを　つっついたんだもの。

子三　ぼくだって　だれかに　やられたんだよ。

母　それが　いけないんです。もっと　しんけんに
なって、ふざけないで　やらなくちゃ。



みんな　ごめんなさい。こんどは　ちゃんと　やります。

母　では、こんどは　しっかり　やって　ください"
よ。あ、そうそう。なんにも　ないと　さわぐ"
から、これを　かじって　おいでなさい。

子七　やあ、にんじんか。

母ねずみは　いって　しまう。

子三　ねえ、五ちゃん。

子五　だまって、だまって。

子六　おはなしは　いけないよ。

子四　この　にんじん　おいしいわね。

母

母ねずみが　やって　き、
て、ぼうで　ゆかを　た、
たく。子ねずみは　にげ、
まわる。子ねずみも　に、
げおくれる。
七ちゃん、つかまえまし、
たよ。そんなに　のろま、
だと、とても　みこみが
ありません。さて、かく、
れた　子どもたちは　ど、

うかしら、一ばん　じょ、
うずに　かくれたのは、
だれでしょうね。
おや、おや、ここに　しっ、
ぽが　出て　いますよ。

子一　いたい。

母　いたい　どころでは　あ、
りません。こんな　かく、
れかたでは　こまります、
ね。おや、おや、耳の

出て　いるのは　だれです。

子二　いたい、いたい。

母　これも　ねこに　つかまって　しまう。こまり"ましたね。おや　おや、足が　出て　いますよ。

子四　いたいわよ。

母　これでは　なんにも　なりません。かくれて　いる　つもりですか。おや、まあ、この子は　だれです。おしりが　すっかり　出て　います"よ。あたまだけしか　かくれて　いません。

子三　あ、くすぐったい。

母　どうも　たいへん　へたです。こんな　かくれ"かたでは、とても　一人前の　ねずみには　な"れません。ごちそうは　あげられません。

子五　いやだわ。ちょうだい。

みんな　(くちぐちに)　ちょうだい。ちょうだい。

母　いけません。かくれかたが　へただから　あげ"られません。

子七　こんどは、じょうずに　かくれるから　ちょう"だい。

母　じょうずに　かくれたら　あげます。だから、

もっと　いっしょうけんめいに　かくれるんで
すよ。さあ　ようい　して　ください。

子六　こまったわね。

子一　こまったね。こんなに　かくれかたが　へただ
と、みんな　ねこに　つかまって　しまうね。

子二　どうしたら　いいかしら。

子三　そうだ。ぼくが　かくれるから　見てよ。いい
かい。

子五　だめ、だめ。それでは　すぐ　わかって　しまう。



子三　こんどは　いいかい。

子四　もう　すこしよ。

子三　これなら　どうだい。

子七　あ、こんどは　いい。ちっとも　見えない。

子五　では、こんどは　ぼくのを　見て。
子ねずみたちは　くみを　作って　かくれかた
を　ちゅういしあう。

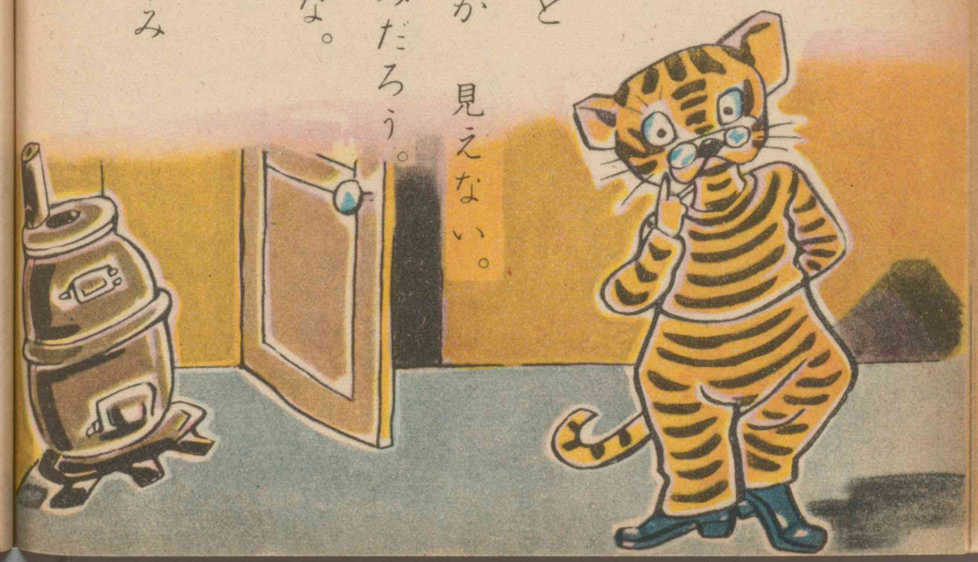
子六　やっと　わかったわ。じぶんでは　見えないか
ら　わからなかったのね。

子一　こんどは　だいじょうぶだよ。

カチッと　音が　する。
子ねずみたち　かくれる。
ねこが　出て　くる。

ねこ

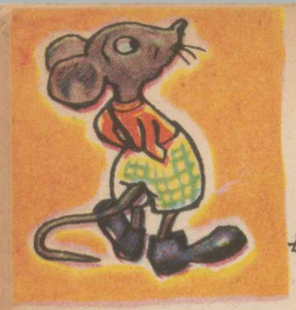
ねずみが　たくさん　いたと
思ったのに、もう　すがたが　見えない。
なんと　すばしこい　ねずみだろう。
うまく　にげて　しまったな。
いまいましい　ねずみだ。
ねこ　いって　しまう。母ねずみ
出て　くる。



母

今、ねこが　きたようだけれど、うちの　子に
あやまちでも、なければ　いいが。うまく　が
くれたかしら。
一ちゃん　出て　きなさい。へんじが　ない。
どう　したんでしょう。
二ちゃん、二ちゃん。　どう　したのかしら。
三ちゃん、四ちゃん。だれも　へんじを　しない。
たいへんだわ。一ちゃん、二ちゃん、三ちゃん、
四ちゃん、出て　きなさい。
どこへ　いったの。おかあさんですよ。

子一　なあんだ。おかあさんか。おい、もう
だいじょうぶだよ。みんな　出て　おいで。
子二　ああ　くるしかった。
子三　だまって　かくれて　いるのは　つらいね。
　　みんな　出て　くる。
母　まあ、そんな　ところに　かくれて　いたの。
おかあさん　ちっとも　わからなかったわ。
まあ、そこにも　いたの。
あんまり　かくれかたが　うまいので、ちっ
とも　気が　つかなかった。



子一　おかあさんも　気が　つかなかったんですって。
母　たいへん　じょうずに　なりましたよ。よかっ
たわね。
子五　だって　ぼくたち　けいこ　したんだもの。
母　そう、けいこ　したんですか。
子一　それに　ほんとうの　ねこが　きたんだもの。
こわくて　こわくて、いきも　できなかった。
母　ほんとうに　いっしょうけんめいに　なると
うまく　いくのです。さあ、では　ごほうびに
おいしい　ごちそうを　あげましょう。

さあ　みんな　ならびなさい。

子二　どこへ　いくの。

母　おかあさんに　ついて　いらっしゃい。

おいしい　ごちそうが　たくさん　あるの。

です。みんなは、かくれるのが　うまく　なっ。

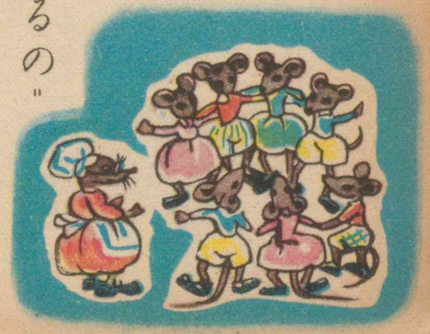
たから　おかあさんも　あんしんして　つれて

いけるんです。

みんな　わあい、わあい。うれしいなあ。

母　シーッ。（とめる）

子ねずみたち、母ねずみに　ついて　いく。





七　わたくしの　けいこ

一　月夜の　おにわ

やさしい　声で、　すらすらと　よめるように　しましょう。

○「月夜の　おにわ」と「竹とりの　おきな」は、なんども　よんで、本を　見ないでも　いえるようになりましょう。

○「竹とりの　おきな」は、「　」のある　ところと、ない　ところに　わかれて、ともだちと　よんでみましょう。

○「竹とりものがたり」を　よんで、おもしろかった
こと、美しかった　ことを　話しあいましょう。
この　お話を　かみしばいに　して　ごらんなさい。

## 二　山のぼり

あいこさんたちの　くみは、山のぼりを　しました。
あいこさんは、それを　長い　ぶんに　かきました。
○道ばたに、どんな　ものが　ありましたか。つぎの
ものを、見た　じゅんに、ばんごうを　つけて　ご
らんなさい



水車　まるきばし　小さな　たき
もみじの　とんねる

○まるきばしを　わたる　時、どんな　ことが　あり
ましたか。話して　ごらんなさい。
○山の　上から、つぎの　ものは、どんなに　見えま
したか。かいて　ごらんなさい。
町　学校　でんしゃ
たんぼ　海

## 三　にわとり

見なれた　ものでも、くわしく　見ると、それまで
気の　つかなかった　ことが、おもしろく　見えて
きます。ひろしさんは、見たまま、きいたままを、じ
ぶんの　ことばで　かきました。

○かきは　どんなに　して　もぎますか。話して　ご
らんなさい。

おちば、かれ木、しも、きりなどを　よく　見て、
あなたが、じぶんの　目で　見つけた　ことを、か
いて　ごらんなさい。

○「にわとり」の　ぶんで、○を　つけて　三つに　くぎっ



て　ある　ところは、にわとりの　どんな　ようす
が　かいて　あるのですか。一つ　一つに『だい』を
つけて　ごらんなさい。

## 四

さむい　日

きよしさんは、さむい　日の　にっきを、つづけて
かきました。

(一)を　つづけて　よんで、その日　その日に　どん
な　ことを　したか、かいて　ごらんなさい。

さむい　日には、外の　ようすが　どんなに　かわ

りますか。いつもと・かわった　ところを　見つけて、かいて　ごらんなさい。

○つぎの　ことばを　つかって、すきな　ぶんを　作って　ごらんなさい。

すずめ　雪　火ばち

○つぎの　ことばを　くみあわせて、雪だるまの　ぶんを　作りましょう。

目　口　はな　ひげ　木　すみ　松の　は

○しょうぼう犬は、どんな　ことを　しましたか。かんしんした　ことや、おもしろいと　思った　ことを、



話しあいましょう。この　お話を、うちの　人に　よんで　きかせて　あげましょう。

## 五　赤い　ポスト

赤い　ポストは、ものを　いわないけれども、たいせつな　やくめを　して　くれます。あなたが、とおくに　いる　人に、なにか　しらせたいと　思う　ことを、手紙に　かいて、ポストに　入れると、それを　その　人に　はこんで　くれます。とおくに　いる　人が、あなたに　なにか　しらせたいと　思えば、や

はり　手紙に　かいて、ポストに　入れます。

○きよしさんは、山の　おばあさんに　なんと　いって、手紙を　だしましたか。山の　おばあさんから、は、きよしさんに、なんと　いって　手紙が　きましたか。みじかい　ぶんに　かいて　ごらんなさい。

○きよしさんは、手紙を　ポストに　入れるまでに、どんな　ことを　しましたか。かいて　ごらんなさい。

○(二)の　ぶんに　ある「おねがいします。」と、(三)の　ぶんに　ある「ありがとう。」の　ことばは、だれが、どこで、だれに　いおうと　した　ことばですか。



○あなたも、あいてを　きめて、手紙を　かいて　ごらんなさい。

## 六　たんじょうかい

きよしさんたちは、たのしい　たんじょうかいを　しました。

○あなたたちも、みんなで　プログラムを　作って、たんじょうかいを　しましょう。

○うちの　人に、おまねきの　手紙を　かきましょう。

○あなたの　小さい　時の　ことを、うちの　人に

きいて、みんなに　お話して　ごらんなさい。

○「ねずみの　かくれんぼ」の　げきは、どこが　おも
しろいと　思いますか。
あなたたちも、やくを　きめて、かわるがわる　こ
の　げきを　して　ごらんなさい。

○「うめの花」の　ぶんを　よんで、どこが　よいと
思いますか　話しあいましょう。あなたも　このよ
うな　ぶんを　かいて　ごらんなさい。



## あたらしい　ことば


あいて……88
あき……22
あせ……39
あてな……76
あぶりだし……62
あみもの……72
あやまちや……117
(おお)あらし……18
あらわれ……26
いいやら……65
いかにも……14
いかれます……50
イギリス……66
いちにんまえ……113
いちもくさん……68
いっしんに……94
いまいましい……116
いもど……45
いわい……44
いわれました……13
うす(をついて)……31
うら……56
うろうろ……65
うわさ……21
おき……18
おきな……6
おくって……91
おしゃかさま……11
おった(きもの)……15
おとぎばなし……8
おばえて……73
おろせ……20
およめ……9
かかりました(いしゃに)……97
かぐやひめ……8
かけつける……67
かじって……109
かせぎ……6
かたあし……54
がっかり……16
かつぎ……6
(お)かって(どうぐ)……45
(いねを)かった……41
かなしそう……22
かわ……15
かわって(いった)……89
かんしん……85
きざんだり……46
きし(むこうぎし)……34
きた(北をむいて)……57
きって(をはる)……76
きね……31
きんじょ……90
ぎん……13
くすぐったい……112
くちばし……56
くら……24
くりかえして……94

くるしい……9
げき……95
けしき……43
けらい……19
げんかん……82
こおり……57
こごえた……59
ごしょ……21
こっそり……11
(たち)こめる……68
こわして……97
さいくにん……13
さけび……20
さむらい……24
ざる……49
(おお)さわぎ……21
しあわせ……8
(五)しき……17
じく……63
しずみそうに……68
しっぽ……110
じてんしゃ……82
しの……8
しゃしょう(さん)……98
しゃしん……99
じゅうごや……22
じゅくし……50
じゅんじゅん……47
(お)しり……112
しる……62
じれったく……107
しんけんに……108
しんぱい……73
すいしゃ……30
すぎて……58
すずむし……5
すっかり……18
すてて……12
すばしこい……116
すみ(てや〜)……62
すみ(でか〜)……83
するどい……104
すんで(いえに)……66
ぜひ……73
(二)せんにん……25
(かわ)ぞこ……29
(うけ)そこなって……49
そだてた……23
そちら……89
(一)だい……25
だいぶん……30
(しょうぼう)たい……66
たき……29
たすけ……18
たばこや……100
ためして……16
ために……65
たりない……96
たるがき……50
たわら……52
たんじょう(かい)……44



ダンス……94
ちくび……97
(お)ちち……96
ちゅうい……115
ちょうじょう……39
つがえよう(ゆみやを)……25
つきよ……4
つつく……105
つぼめる……53
つらい……118
つるし……50
なや……46
なわとび……59
にっぽん……13
(ふく)を)ぬっている……94
(お)ねがい……23
ねかた……6
ねこ……102
ねもと……46
ねんね……99
のき……19
(とり)のこされる……65
のりもの……97
のろのろ……41
のろま……110
(ゆうびん)はいたつ……80
はごろも……27
(じゅばんの)はし……68
はしご……46
はち……11
はねかえり……48
はりあげて……5
ばん(十五夜の)……24
はんし……63
ひ(ねずみ)……15
ひきよせて……48
ひざ……101
ひさし……45
ひめ……7
ひゃくにん……25
ひより……7
ふうとう……76
ふきだし……62
ふざけ(たい)……108
ふし……8
ふすま……55
ふつう……96
ふと……87
ふみきりばん……98
ふえる……18
ブログラム……94
ふん……20
へた……113
べつ(の)……100
ベル……82
(いっ)ぽ……34
ぼうし……39
(ご)ほうび……119
ぼっちゃん……80

まぜて……54
マッチ……63
まないた……45
(お)まねきする……71
まばゆかろう……7
まぶしい……25
ままごと……45
まもなく……18
まもって……23
まるで……99
まるみ(がかった)……39
まるめて……46
みかど……21
みこみ……110
ミシン……83
みずたまり……57
みせかけて……11
みぶり……36
みぶん……10
みやこ……22
ミルク……97
むかえ……100
むしろ……45
むすめ……9
むちゅうで……20
もうもうと……68
もえて……65
もがく……69
ものがたり……6
もろこし……15
やけない(やけど)……16
ゆか……110
ゆびさして……68
ゆみや……24
らくだい……108
らくな……99
りこうな……66
りっぱな……9
りゆう……17
りょうがわ……32
(いち)れつ……35
ロンドン……66
(お)わかれ……26
わけ……22



## かんじ

夜よ (4)
天てん (11)
銀ぎん (13)
家いえ (19)
都みやこ (22)
道みち (28)
気き (36)
歩あるく (53)
名な (66)
送おくる (91)
玉たま (4)
寺てら (11)
話はなし (14)
入いれる (20)
百ひゃく (25)
少すこし (32)
前まえ (39)
指ゆび (54)
女おんな (67)
糸いと (93)
野の (4)
古ふるい (11)
火ひ (15)
地じ (20)
千せん (25)
走はしる (33)
毎まい (44)
太ふとい (56)
分ふん (68)
汽き (98)
金きん (6)
東ひがし (12)
取とる (17)
秋あき (22)
車くるま (25)
列れつ (35)
朝あさ (44)
北きた (56)
答こたえる (81)
母はは (102)
美うつくしい (9)
根ね (13)
流ながれる (18)
近ちかく (22)
紙かみ (27)
元げん (36)
時とき (44)
字じ (57)
清きよし (91)

よみかえ


月つき (4)　日にち (13)　山さん (14)　年とし (15)　金かね (15)

か (57)

夜よる (22)　水すい (30)　車しゃ (30)　小しょう (45)　先さき (48)

や (22)

十とお (57)　二ふたつ (67)





赤いポスト　しょうがくこくご　二年下　（小学校国語科第二学年後期用）

昭和二十六年　月　日　印刷
昭和二十六年　月　日　発行
（昭和二十五年八月十二日　文部省検定済）

定価　金　円

小国　230

著作者　大阪書籍国語編修委員会
代表者　重松鷹泰

発行者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地
大阪書籍株式会社
代表者　松村九兵衛

印刷者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地
大阪書籍株式会社
代表者　松村九兵衛

発行所　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地
大阪書籍株式会社

既成の作品から引用したものは次の通りであります

月夜のおにわ　祖馬御風
竹とりものがたり　北原白秋
しょうぼう犬　トルストイー
ねずみのかくれんぼ　落合聽三郎

編者

監修
奈良女子高等師範学校教授
同附属小学校主事
重松鷹泰

編修・執筆
奈良女子高等師範学校教諭
今井鑑三
同　笹倉美好
同　浜真喜男

挿画
樋口富麻呂

広島大学図書
広島大学図書
0130449884

大阪書籍株式会社